

住宅設計における居場所づくりの提案

ーコミュニケーションを通じて自己表現ができる場のあり方ー

213-071 高田 彩加

1. 研究の背景・目的

現在、インターネットやスマートフォンの普及により対話のあるコミュニケーションが激減した。インターネット上でのコミュニケーションが当たり前となり遠く離れた人同士で顔を見ながら話ができるようになり人間同士の付き合い方も変わってしまった。昔は、家族との予定や友達に会うにしても、スマートフォンや携帯が無い為何をやるにしても、実際に会って顔を見ながら話すことしかできなかった。

そして、昔に比べ地域との繋がりが希薄化、家族とのコミュニケーション不足という問題にも直面し、思った以上の劇的な変化が起こっている。このことからコミュニケーションを図る為には、まず場所が必要であり、住宅の中にある居場所が重要であるのではないかと考えた。

本研究は、現代の問題でもあるコミュニケーションを取り上げ、1996年代と現在の住宅内の居場所とコミュニケーションの関係を調べ、居場所が人々にとっての癒しに繋がっているのか考察し、1996年代と現在を比較しながら居心地の良い居場所を明確にすることを目的とする。

2. 研究方法

研究方法として、表1を参考資料とし図1の通りに進めていく。

表1. 参考資料

雑誌名	年月号	巻数
新建築「住宅特集」	1996年1月～2017年6月	#117～#362
「住宅建築」	1996年1月～2015年12月	#250～#455

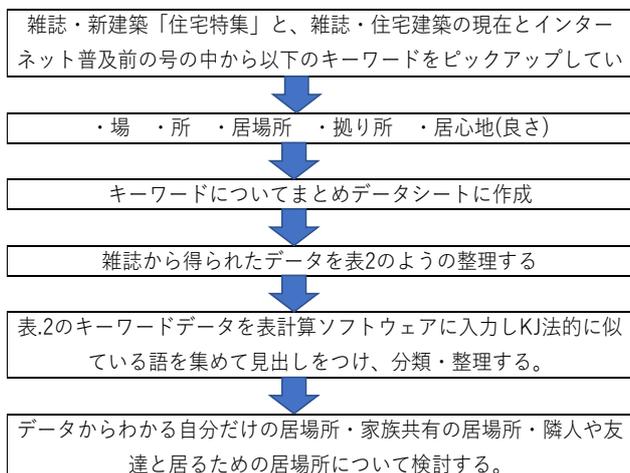


図1. 研究方法のフロー図

表2. 雑誌から得られたデータ①～⑮

①	ナンバリング	NO.3	⑮ ピックアップ記事 ・福岡県宗像市の閑静な場所に建つ4人家族のための住宅である。 ・かつては長閑な田園封風景だったこの場所も、近年住宅群が立ち並び、徐々に都市化の様相を見せている
②	物件名	5層のワンルーム住居	
③	設計者	松山建築設計室	
④	掲載年月日	2017.5	
⑤	所在地	福岡県 宗像市	
⑥	間取り	3LDK	
⑦	主要用途	専用住宅	
⑧	家族構成	夫婦+子供3人	
⑨	階数	地下1階+地上2階	
⑩	敷地面積	336.87㎡	
⑪	建築面積	96.94㎡	
⑫	建蔽率	28.78%	
⑬	延べ床面積	109.59㎡	
⑭	容積率	32.53%	

3. 居場所に関するデータの抽出

図2を見てみると、住宅物件数は、さほど変化はないが1つの物件の居場所を重視したものが増え、1996年から2016年のキーワード数は3.9倍に伸びている。表3.からわかるように居場所について多く工夫されるようになったことがわかる。

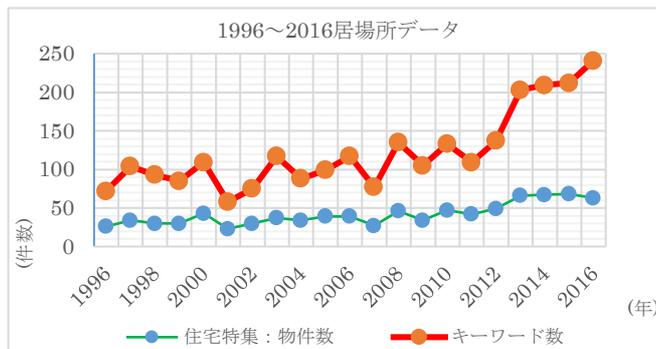


図2. 1996年～2016年の居場所データ

(※2001年と2007年は別荘特集があったため物件が少ない。)

表3. 「居場所」について説明している文章の例

ビルの谷間を見下ろすような視点があるかと思えば、地下から地上を見上げるような <u>場所</u> がある。
行き交う人や子どもたちが立ち止まり、ひと時の <u>憩いの場</u> となることを期待したものである。
小さなコヤのような離れを、縁側のような人の <u>居場所</u> や活動を生む仕組みへと導き、母屋と離れの暮らしがお互いに寄り添える関係性を築いた。

4. 考察・結果

小さなコヤのような離れを、縁側のような人の居場所や活動を生む仕組みへと導き、母屋と離れの暮らしがお互いに寄り添える関係性を築いた。

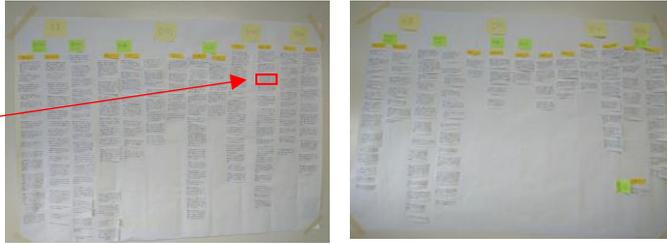


表 4. KJ 法による居場所の考察

項目	内容
精神的	2017年になると、家の中に癒しや落ち着く場所を求めるものが増え、家族共有の場所よりも個々の場所に居心地の良さを求めるように変化し個々の活動も家でするように変化していった。
身体的	1997年代の住宅における居場所は家族だけでコミュニケーションを図るために設計されたものが多く、個々を重点に置かず、活動するための場所はほとんど設計されていなかった。
空間	1996年代に比べ2017年代は家自体に開放的な造りが増え、家全体あるいは庭を含めた居場所を設計するようになった。
配置	住宅の居場所は設計者が作り上げるものではなく、入居者が生活し始めて居場所を作り上げていき、場所に变化を加えながら一緒に成長していくものが増えてきている。

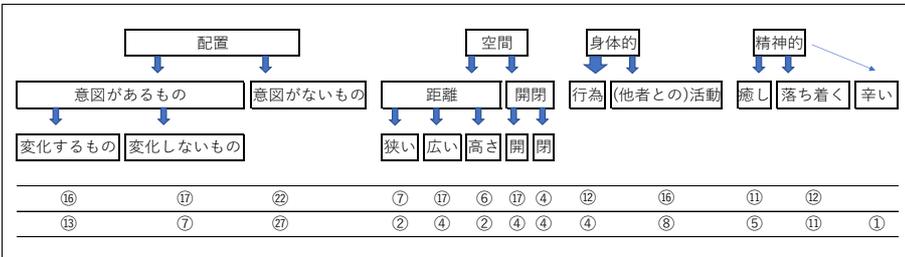


図 3. KJ 法にかけた記述例(左上)、2016 年代(中央上)と 1996 年代(右上)を KJ 法にかけたもの、KJ 法のキーワード分類数(下図)

4-1. KJ 法による分析と考察

居場所のキーワードを KJ 法にかけ図 3 のように分類し、分析した。

分類したものを KJ 法にかけ、居場所について考察したものが表 4 になる。

4-2. 居場所の具体例

1996 年代の図 4 は LDK とロフトを居場所とし、2016 年代の図 5 は LDK や妻の部屋・夫の部屋・階段の吹抜けを居場所とした。

例えば「上馬の住宅」は、家族が過ごす場として LDK と LDK の上部に隣接しているロフトを中心とした家族との距離が感じられる空間設計になった。

しかし「TRANS」は、現在の住宅における居場所を考慮して設計されている。生活リズムの異なる夫婦は、寝室は一緒にしつつもリラックスするには別の居場所が必要であった。そのため、階段や吹抜けを通してお互いを感じることができ居心地の良い空間設計になった。

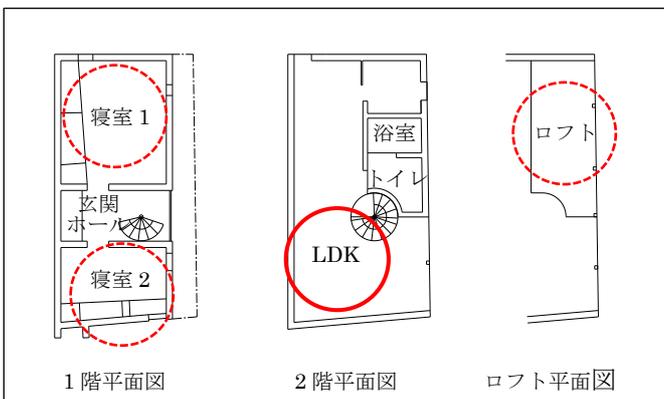


図 4. 1996 年代の住宅における居場所 (住宅特集「上馬の住宅」の図面より作成)

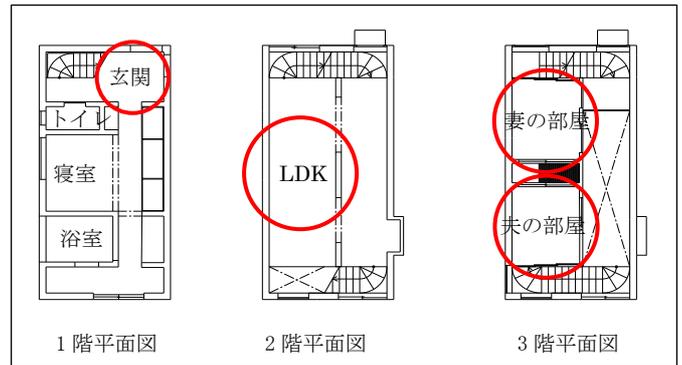


図 5. 現在の住宅における居場所 (住宅特集「TRANS」の図面より作成)

5.まとめ

KJ 法より 1996 年代の住宅設計のほとんどが、居場所として捉えていなかった。個室や寝室もあったが、ほとんどリビングを居場所として設計されていた。しかし、2016 年代の住宅設計はリビングだけでなく、個室や寝室、階段、庭など住宅全体を居場所とし、意図的に設計されるようになった。

住宅全体に居場所を散りばめることにより、居場所に求められるそれぞれの住宅に合った、空間づくりと、それらの居場所を繋ぐ方法の提案が、これからの設計で重要になると思われる。

【主要参考文献】

- 『発想法』：川喜田二郎，中公新書，1967
- 『新建築「住宅特集」』，株式会社新建築社，2017.05号
- 『住宅建築』，建築資料研究社
- 『パブリックスペースの使いこなしに関する研究』 - ビクニック利用者が設える一時的な居場所にみる人間-環境関係，小林

(岡山研究室)